真の宗教とは何か。

聖書通信-24

統一教会の問題

霊感商法という言葉をお聞きになったことがあるでしょう。
一時期話題になりましたが、その後鳴りを潜めていました。しかし元首相の暗殺事件を契機にして再び注目を集めています。
信者を食い物にする統一教会と政治家の結びつきが明らかになり、批判が高まっています。

霊感商法で扱われる商品の一部
書籍は一冊3000万円とも　壺は何百万円とも言われる

悪い宗教と言えば、最近ではオーム真理教が問題になりましたが、歴史をひもといても、宗教に起因する問題が数多くおきています。

では宗教が悪いのでしょうか。
そうではありません。悪い宗教があるのは事実ですが、宗教は人々の心の癒やし、また救いとなってきたのも事実です。

宗教心は動物にはなく、人間に与えられた崇高な賜であると言えます。

では真の宗教といえるものがあるのでしょうか。

確かにあります。ではどのような宗教が真の宗教であると言えるのでしょうか。

真の宗教を見いだすヒント

まず宗教の起源に目をとめる必要があります。
先ほども述べましたが、宗教心は人間に与えられたものです。

では与えた方は誰でしょうか。　人間を創造された真の神であると言えます。

真の宗教の起源も単なる人間の思いつきではなく、真の神から与えられたものであるはずです。

神は人間に「真の宗教とは何か」というメッセージを残していますか。確かに残しています。それが聖書です。

聖書を調べるならその中に真の宗教を見いだすことが出来ます。

では真の宗教とは何でしょうか。

アラビア半島にある本当のシナイ山

真の宗教の歴史

聖書によると人類史の最初から神を崇拝し神に犠牲が捧げられてきました。
その後エノク、ノア、アブラハムなど真の神を崇拝する人々によって真の宗教が連綿と伝わり、イスラエル国民へと受け継がれます。

モーセの時代に、イスラエル国民がエジプトを脱出し、シナイ山で神とイスラエルの間に画期的な契約が結ばれます。
その時神によって石版に十戒が書き付けられイスラエル国民に与えられたのです。
有名な律法であるその十戒の中に、真の宗教とはどのようなものであるべきか述べられていました。
では十戒を見てみましょう。

①「私はあなたの神エホバである。奴隷となっていたあなたをエジプトから連れ出した。あなたは私以外のどんなものも神としてはならない。
②あなたは，天や地や水の中にあるものに似たどんな彫刻像や形も作ってはならない。 それにひれ伏してはならず，誘われてそれを崇拝してもならない。あなたの神である私エホバは全くの専心を要求する神である。私を憎む人については，父の過ちに対する処罰を子や孫やひ孫に及ぼす。 私を愛して私のおきてを守る人については，子孫千代にまで揺るぎない愛を示す。

モーセに与えられた十戒

③あなたの神エホバの名をむやみに用いてはならない。その名をむやみに用いる人をエホバは処罰せずにはおかない。

④神聖な日である安息日を忘れずに守りなさい。6日間働いて全ての仕事をする。 しかし，7日目はあなたの神エホバの安息日である。どんな仕事もしてはならない。あなたも息子や娘も，男奴隷や女奴隷も，家畜も，あなたの町にいる外国人居住者もである。 エホバは6日間，天と地と海とそこにある全てのものを造り，7日目に休み始めたからである。それでエホバは安息日を祝福し，その日を神聖なものとしたのである。

⑤父と母を敬いなさい。そうすれば，あなたの神エホバが与える土地で長く生きられる。
⑥殺人をしてはならない。
⑦姦淫をしてはならない。
⑧盗んではならない。
⑨仲間について偽りの証言をしてはならない。
⑩仲間の家を欲しいと思ってはならない。仲間の妻や，男奴隷，女奴隷，牛，ロバなど，仲間のどんなものも欲しいと思ってはならない」。
（出エジプト　20:2-17）

最初の部分で真の神のみを崇拝するように教えています。偶像崇拝は固く禁じられました。
ついで安息日を守るように教えています。今日でもイスラム教やユダヤ教に受け継がれています。
行動基準として父と母を敬い、悪を避けるように教えています。

メシア登場

それから1500年ほど経ち、時代は移り変わり、約束のメシアつまりイエスが歴史の表舞台に登場されます。

真の宗教は変化したのでしょうか。
確かにある部分は廃止されましたが、基本的には変わっていません。

イエスは次のように語りました。

あなた方が，この山[ゲリジム山，かつてサマリア人の神殿があった場所]でも，エルサレムでもないところで父（真の神ヤハウェ）を崇拝する時が来ようとしています。……真の崇拝者が霊と真理をもって父を崇拝する時が来ようとしています。それは今なのです」。（ヨハネ 4:21-23）

偶像崇拝は言うまでもなく、特別な場所も重要ではないと述べ、心から、そして正しい行ないによって神をたたえるように教えました。

犠牲を捧げることや割礼、また安息日などはキリスト教によって廃止されましたが、キリストの律法を守るように、つまり愛という最大の律法によって行動するように教えました。
そのことは次の一文から知ることが出来ます。

> 自分は神を崇拝していると思っていても，舌を制御していないなら，その人は自分の心を欺いています。その人の崇拝は無意味です。　私たちの父である神から見て，清く汚れのない崇拝の型（宗教）は，困っている孤児ややもめを世話することと，自分を世に汚されないように守ることです。　（ヤコブ　1:26、27）

1世紀のクリスチャンはイエスの指導の下に良い出発をしました。
しかし変質してしまいます。
何があったのでしょうか。

キリスト教の変質

一つはサタンの影響で偽りの教えがキリスト教の中に入り込み、その結果腐敗して行きました。

そのことをイエスはたとえ話の中で次のように予告していました。

小麦畑にサタンによって毒麦がまかれた

> イエスは別の例えを用いてこう言った。「天の王国は畑に良い種をまいた人のようです。　人々が眠っている間に，敵がやって来て，小麦の間に雑草をまいて去りました。　茎が伸びて実を生み出すと，その時に雑草も現れました。それで，奴隷たちが来て家の主人に言いました。『ご主人さま，畑にまいたのは良い種ではありませんでしたか。それなのに，どうして雑草が生えるのでしょうか』。主人は言いました。『敵の仕業です』。奴隷たちは言いました。『では，行ってそれを抜きましょうか』。　主人は言いました。『いいえ，雑草を抜く時に小麦も一緒に引き抜くといけません。　収穫まで両方とも一緒に成長させておきなさい。収穫の季節になったら，刈り取る者たちにこう言います。まず雑草を抜き，焼くために縛って束にし，それから小麦を倉に集めなさい，と』」。　（マタイ　13:24-30）

どのような意味でしょうか。イエスはそのたとえ話を次のように説明しています。

> それから，イエスは群衆を解散させた後，家に入った。弟子たちが来て，「畑の雑草の例えを説明してください」と言った。　それでイエスは言った。「良い種をまく人は人の子です。畑は世界です。良い種は王国の子たち，雑草は邪悪な者の子たち，　雑草をまいた敵は悪魔です。収穫は体制の終結で，刈り取る者は天使たちです。　それで，体制の終結の時には，雑草が抜かれて火で焼かれるようなことが生じます。　人の子は天使たちを遣わし，天使たちは，人に罪を犯させる人たちと不法なことを行う人たちを王国から取り除き，　火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣き悲しんだり歯ぎしりしたりします。　その時，正しい人たちは父の王国で太陽のように明るく輝きます。耳のある人は聞きなさい。　（マタイ　13:36-43）

実際キリスト教はイエスの教えから遠く離れてしまい、異端審問、十字軍など腐臭で満ちた記録を残しています。
　もう一つの原因は人間の自然の性向がキリスト教を腐敗に導いたと言えます。

> 「狭い門を通って入りなさい。滅びに至る道は広くて大きく，それを通って入って行く人は多いからです。一方，命に至る門は狭く，その道は狭められており，それを見いだす人は少ないのです」― （マタイ 7:13，14。）

真の宗教を見いだすことも、それに基づいて歩むことも難しいことをイエスは述べています。

真の宗教が明らかにされる

とはいえ、真の宗教が存在しないというわけではありません。

先ほどのイエスのたとえ話の中でも「小麦」として表現されていた真の崇拝者たちがいつの時代にも存在していました。

また偉大な神がおられる限り、真の宗教は存在し続けます。
次のように予告されているように、この終わりの日に真の宗教が明らかになります。

> 最後の日々に，
> エホバの家の山（真の宗教）は，
> 山々の頂より高くしっかりと据えられ，
> どの丘よりも高くそびえる。
> 全ての国の人々が流れのようにそこに向かう。
> 多くの人々が行って，こう言う。
> 「さあ，エホバの山に登ろう。
> ヤコブの神の家に行こう。
> 神はご自分の道について教えてくださる。
> 私たちはその道を歩もう」。
> 律法がシオンから，
> エホバの言葉がエルサレムから出る。
> 神は国々の中で裁きを下し，
> 多くの人々を正しい方向に導く。
> 彼らは剣をすきに，
> やりを鎌に作り替える。
> 国は国に向かって剣を振り上げず，
> 彼らはもはや戦いを学ばない。
> （イザヤ　2:2-4）

真の神エホバ(ヤハウェ)に対する崇拝が高められる

偶像崇拝をやめ、創造者である真の神を崇拝し、聖書の教えに固く着く宗教が真の宗教であると言えます。愛という律法に基づき互いを愛する人々でもあるべきです。

ものみの塔誌の中に次のような経験が載せられていましたのでご紹介します。

「そうです，真の宗教は善をなす強力な力となって，信者たちに有益な感化を及ぼすはずです。一例として，昭則さんのことを考えてみましょう。本人の言葉を借

りれば，彼は「競争心のかたまりになって」，一流大学を卒業して大企業に就職するという目標を見事に達成しました。人生に宗教は不要だと感じ，『宗教は人生に支えが必要な弱い人のものだ』と考えていたのです。
何もかも順調にいっていましたが，ある時ストレスと過労がたたって大病を患いました。首がねじれ，あごが左肩に″くっついて″しまったのです。会社にいた大勢の″友人″も，この苦しい時にほとんど慰めになってくれませんでした。（箴言 17:17と比較してください。）そのためアルコール漬けになり，死ぬことさえ考えるようになりました。
しかしやがて，奥さんがエホバの証人と聖書研究を始めました。ある日のこと，奥さんと話をしていると，「人は自分のまいているもの，それをまた刈り取ることになるのです」というガラテア 6章7節の聖句が話題に上りました。その言葉に心を打たれた昭則さんは自分も研究をすることにしました。そうして学んだ事柄は昭則さんの人生観を変えました。見方が明るくなるにつれ，ストレスからくる病気も快方に向かうようになりました。聖書の格言にあるとおり，「穏やかな心は身体の命」なのです。（箴言 14:30）確かに，真の宗教はりっぱな実を生み出します。」